〈資料紹介〉「壬生地蔵縁起絵巻」注釈（四）

八木智生

「壬生地蔵縁起絵巻」は、壬生寺（京都市中京区、律宗、本尊は延命地蔵菩薩）に所蔵されている。本文はすでに、元興寺仏教民俗資料研究所編『壬生寺民俗資料緊急調査報告書　第三分冊』（壬生寺、一九七五年）に翻刻されているが、いくつかの誤りが認められる。そこで、あらためて原本を参照して翻刻と注釈を行うことにした。

本稿では、第六巻第一話～第六巻第五話を対象とする。

【凡例】

一、底本には、原本を用いた。

二、本注釈は、本文、語注、補注からなる。

三、本文は、底本を翻刻し、基本的にその通り表記した。ただし、通読の便宜のため、適宜次の操作を行った。

- 任意の改行をほどこし、各段落の先頭は一字下げた。
- 旧字、異体字は通行の字体に改めた。
- 底本の細字、割注は〔　〕で示した。
- 句読点、濁点を補った。
- 明らかに錯簡と思われる部分には、〈錯簡〉と表記した。
- 絵は〈絵〉と示した。
- 貼紙は〈貼紙〉と記し、内容を枠内に示した。

四、語注には、本文中に「＊」を付した語句について、それぞれ記述した。難解な語句や固有名詞などを解説している。

五、補注では、語注では解説しきれなかった、主にその段全体にかかわる問題について、さらに考察を加えている。

六、各話の最後に、版本『壬生寺縁起』（元禄十五年序）の該当話を記した。なお、版本の説話標題は版本巻頭の目録による。

七、注釈にあたって、多くの文献・論文・辞書から教示を得たが、紙幅の都合上省略した。

第六巻

一　当寺鎮守六所大明神事　正元々年

【本文】

夫鎮守権現六所大明神は、其濫觴を尋奉れば、*天神七代地神五代より始り、又王法もこれより伝る。然則、神明の本地ははかり難し。遠く*月氏の経論にも出ず。近く漢家の典籍にも載せず。また*天仙化人の説をもきかず。*三蔵諸師の口決にも伝ず。唯我朝の風俗として人倫あひつたへ、世こぞりて信奉る。或は託宣の文に依て*大権の垂迹をしり、或は夢想の告を以て*和光の本地をあふぐ者なり。

いま鎮守権現の事、以往の儀は*十禅師一社を以て根本の鎮守とす。是併本地と垂迹と相並て*応作を施しおはします。*内証をあらはし給ふ*山王上七社の中の第六の宮は十禅師権現、本地六道能化の地蔵菩薩なり。迷の前には神と現じ、悟の前には仏とあらはれ給へり。迷の衆生を誘て*安養界にいたらしめむ方便なり。

吾朝の*聖徳太子は救世観音の変作として*再生利物の慈悲に安住して、かりに日域に生をうけ給ふ。されば日本六十余州十万八千の諸神、まち〳〵にかわりましますといへども、*後得大悲の門に出させ給ゆへに皆是観世音なり。いわゆる聖徳太子の利生方便なるべし。三世十方の仏菩薩の慈悲をば観音一菩薩の領受し給へり。*三世諸仏大慈悲皆集一体観世音と説てこの意なり。元より*大悲闡提の中には、*地蔵・観音をば同体異名にして、いづれも勝劣なしといへども、大悲利生の至極者たる是地蔵の御慈悲なり。凡国土冥界日月星宿等は皆観自在の化作にして、地蔵薩埵の変化なるをや。*笠置上人、春日社に参籠して諸神の本地を祈申されし時、大明神の御示現に四句の文を御託宣ありき。*本体観世音、常在補陀落、為度衆生故、示現大明神と上人にしめし給へり。天照大神も十一面観音なり。*内外両宮の時は金胎両部也といへども、その大日の御慈悲は観音なり。

いま当寺鎮守を六所権現と申は、*嘉禄年中に甲斐法橋*覚玄、別願として五所大明神を副勧請したてまつる。所謂八幡・熊野・稲荷・祇園・北野等の五社是なり。神主は大夫*中原広保に補らる。爰に*正元々年四月廿三日戌刻ばかりに、鎮守権現参社の小人に種々の御託宣あり。その神詞に云、鳥居ノ内瑞籬ノ辺リ閑寂而、社壇宝前御神楽ノ風流等希有也、何況於法施哉と少人に託たまふあひだ、一寺の衆僧評議をなして当神主図書権ノ助*中原朝臣栄定ならびに

諸堂の預等に課て、毎年五月十三日を以て祭礼をなしたてまつる処なり。

【語注】

天神七代地神五代　『日本書紀』神代巻にある、天地開闢の時生まれた天上の七代の神々と、続いて日本を治めた五代の神々。

月氏　中国古代、遊牧民族が中央アジアに大月氏国を建て、以降この地を本拠とする民族は月氏と呼ばれた。一世紀中頃に勃興したクシャーナ朝では仏教が栄えた。『四十二章経』序では、「大月支國」から経典を写し取ったという。

天仙化人　天界の仙人。『法華文句記』に、「佛及聲聞天仙化人。及華厳中加諸菩薩。又有衆生器世。而皆以佛爲教主也。」とある。

三蔵諸師　三蔵（経蔵・律蔵・論蔵）に通じた高僧。

大権　衆生を救うため、仮の姿として現れた仏・菩薩。『沙石集』に、「我朝ハ神國トシテ大權アトヲ垂レ給フ。」とある。

和光　「和光同塵」の略。仏・菩薩が本来の威光をやわらげ、仮の姿をとって現れて衆生を救うこと。

十禅師　日吉山王七社権現の一つ。瓊々杵尊を権現とする。地蔵菩薩の垂迹である。『桂川地蔵記』に、「所詮自天神七代而至地神第三代天津彦火々瓊瓊杵尊。而天地畢竟十代也。受十代之禅給。故言十禅之尊。今現円宗擁護之尊神給。日吉社十禅師是也。御本地者地蔵菩薩也。」とある。

応作　仏・菩薩が衆生に応じた姿を現す、そのはたらき。

内証　心のうちに仏教の真理を悟ること。

山王上七社　日吉大社の本社・摂社・末社の二十一社のうち、大宮・聖真子・二宮・八王子・客人・十禅師・三宮。

安養界　極楽浄土。

聖徳太子は救世観音の変作　『法華開示抄』に、「聖徳太子。是救世観音権化身也。」とある。聖徳太子を救世観音の化身とするのは、『聖徳太子伝暦』にあるほか、多くの聖徳太子講式にみえる。

再生利物　「再生」は再びこの世に生まれてくること。「利物」は衆生に利益を与えること。

後得　悟った後に得られること。

三世諸仏大慈悲皆集一体観世音　『総持抄』に、「觀音本地。觀自在王如來也。觀自在王如來者。阿彌陀ヲ言也。三世諸佛。大慈悲皆集一體。觀世音極樂稱爲無量壽。娑婆示現施無畏文觀音ハ阿彌陀也。」とある。

大悲闡提　大悲心をもって世のすべての人々を救おうとする菩薩。すべてを救いつくすことはできないため、ついに仏となることはできない。

地蔵・観音をば同体異名にして　『沙石集』に、「殊ニ地蔵ハ彌陀・観音ト同體也。眞言ノ習ニ、台藏ノ曼荼羅ハ、大日一ノ身也。是ヲ支分曼荼羅ト云。一々ノ支分、一善知識トナリ、有縁ノ機ヲ引テ菩提ノ道ニ入。然ニ彌陀ハ大日ノ右肩、観音臂、地藏ハ指也。」とある。

笠置上人　貞慶。号は解脱房。一一五五～一二一三。法相宗。藤原貞憲の子。戒律に厳しく、旧仏教の改革を提唱した。

本体観世音、常在補陀落、為度衆生故、示現大明神　『本朝神仙伝』泰澄に、「於稲荷社。数日念誦。夢有一女。出自帳中告云。本体観世音。常在補陀洛。為度衆生故。示現大明神。」とある。この文は『梁塵秘抄』や、『麗気記』にもある。典型的な神仏習合思想の表現といえよう。

内外両宮の時は金胎両部也　「内外両宮」は伊勢神宮の内宮と外宮。「金胎両部」は金剛界と胎蔵界。『溪嵐拾葉集』に、「内外宮ハ因果両部曼荼羅ノ意也。」とある。

嘉禄年中　一二二五～一二二七。

覚玄　不詳。

中原広保　『中右記』・『師守記』に外記として名がみえる。

正元々年　一二五九。

中原朝臣栄定　不詳。

（版本：上巻第十話「当寺鎮守の事」）

一　当寺鐘鋳政平瑞夢并官有家師檀事　弘長二年

【本文】

願主左衛門尉*政平、*弘長二年閏七月十五日にいたりて、当寺堂前の大庭におひて*金鐘を鋳冶して楼閣に安置せらる。鋳物師*土師宗貞をもて大工とす。

夫諸経に鐘を鳴す聞声の功徳を説に、或は*当願衆生一聴鐘声、脱三界苦得証菩提といひ、或は*可資身進道者、即是増長善法之具〔善法之具とは所蓄の鐘なり〕といひ、或は*阿難升ニ講堂一撃ニ犍椎ヲ一者ハ、此ハ是レ如来信鼓也といふ。此等の仏語いづれも*出離*得道の最要たり。経に*犍椎者梵語なり。爰には翻して磬となづけ、又は翻して鐘と号す。*律文に集僧の法を出すに七種あり。犍椎その随一也。*此鐘を鳴して十方の衆僧を召するに、聞ことを得てみな雲集して一切の仏事をなすに、受苦の衆生をして安楽の大利を得せしむ。されば*付法蔵伝の中に、*罽賦吒王大殺害をもての故に死て千頭魚の中に入り、剣輪その全体をまとふ。身分を斫にしたがつて、つひで又生ずと云へり。羅漢ありて、僧の為に*維那して時に依て鐘をならす。其こゑを聞に、剣輪すなはち空にありて苦受停息す。かくのごときの因縁により、鐘をながく打に、利益広大也とみえたり。*増一阿含には、*若シ打タン鐘ヲ時、一切ノ悪道諸ノ苦並ニ得ウ二停止一コトヲと説。此ノ意趣深甚なるをや。

爰に惣伽藍造畢の後、*正元々年二月十九日に鐘鋳あるべきよし触催さるゝ処に、政平に本尊夢想の御告あり。六道能化、霊場精舎、有堂有塔、無鐘無楼、進メテ檀ー施ノ力ヲ、成ニ来際ノ縁ー とあらたに示現を蒙る間、弘長二年閏七月十五日にいたるまで延引あり。万民の少施を軽しめず、薩埵の値遇を成ぜしむ。然間、*緇素貴賤集会して財宝をほどこし、道俗男女往来て金銀をなげうつ。其中に当寺の檀越官務*有家宿禰ことに志を抽て、採銅所に下知して十六斤六両の赤銅を送て上野阿闍梨*覚慶に付らる。是によりて金鐘鋳冶の大願速に成就し、結縁の諸人、鐘をならして各随喜の意を発せり。然則、無明長夜の眠をさまして、諸行無常のことわりをしり、法性覚月の暁に至て寂滅為楽のさとりをえん事、何ぞ是を疑はむや。

加之、*正嘉・正元の比、願主左衛門尉政平は官務有家宿禰に対して当伽藍の事相共に敬信ある上は、末代*師檀たるべきよし懇に申送らるゝ者也。しかるに山林田園等を寄付して、真俗*二諦の興隆を致さしめて現当二世の巨益を仰がる。来際をつくして檀那*進止の儀あるべからずと云々。是に依て寺院の修造*退転せず。僧侶踵をつゐで*止住す。

就中、*正嘉元年五月廿九日に大工鋳物師宗貞に課て*金鼓鰐口一口を鋳あらはして宝前にかけ奉り、左金吾政平身づから三箇の逸韻を鳴して薩埵の尊聴をぞ驚す。おなじく参向の人々、貴賤を撰ばず、金鼓を拍て敬白の信心を凝す事、殊勝なる者をや。

【語注】

政平　平政平。三重流平氏。正嘉元年、壬生寺の伽藍を復興する（第五巻第二話）。

弘長二年　一二六二。

金鐘　金で作った鐘。

土師宗貞　奈良県の矢田寺（金剛山寺）の梵鐘（寛元四年（一二四六））に名がみえる。

当願衆生一聴鐘声、脱三界苦得証菩提　しばしば鐘の銘にみられる文である。元禄十一年（一六九八）『浄土諸回向宝鑑』（必夢）には、「聴鐘声功徳文　出増一阿含経　一聴鐘声当願衆生脱三界苦速証菩提」とあるが、『増一阿含経』には確認できない。

可資身進道者、即是増長善法之具　『釋氏要覽』・『翻譯名義集』・『勅修百丈清規』に、「所蓄物。可資身進道者。即是増長善法之具」とある。いずれも『中阿含経』によるというが、不明。

阿難升ニテ講堂ニ撃ニ犍椎ヲ者ハ、此ハ是レ如来信鼓也　『四分律刪繁補闕行事鈔』・『釋氏要覽』・『翻譯名義集』に、「阿難升講堂撃犍稚者。此是如來信鼓也。」とある。いずれも『増一阿含経』によるという。『増一阿含経』には、「是時尊者阿難聞此語已。歓喜踊躍不能自勝。

即昇講堂手執揵椎並作是説。我今撃此如來信鼓。諸有如來弟子衆者盡當普集。」とある。

出離　迷いの境地を離れ、悟ること。

得道　仏道修行によって悟りを開くこと。

犍椎　打って音を出し、時を知らせるものの総称。

律文　律の文章。『四文律』に、「當敷座當打揵稚。盡共集一處。」とあり、相当するか。

此鐘を鳴して～安楽の大利を得せしむ　『四分律刪繁補闕行事鈔』・『翻譯名義集』に、「我鳴此鐘者爲召十方僧衆。有得聞者並皆雲集共同和利。又諸有悪趣受苦衆生令得停息。」とある。

付法蔵伝　『付法蔵因縁伝』。六巻。吉伽夜と曇曜の共訳。釈尊の付嘱を受け、仏法を広めた人々の事績を記す。

罽膩吒王～苦受停息す　『四分律刪繁補闕行事鈔』に、「故付法藏傳中罽膩吒王以大殺害故。死入千頭魚中。劍輪繞身而轉隨斫隨生。若聞鐘聲劍輪在空。如是因縁遣信白令長打使我苦息。」とある。また、『翻譯名義集』に、「付法藏傳中。罽膩吒王以大殺害故。死入千頭魚中。劍輪繞身而轉。隨斫隨生。羅漢爲僧維那。依時打鐘。若聞鐘聲劍輪在空。如是因縁遣信白令長打使我苦息。」とある。なお、『付法蔵伝』には、「罽呢吒王貪虐無道。（中略）生大海中作千頭魚。劍輪迴注斬截其首。續復尋生次第更斬。如是展轉乃至無量。須臾之間頭滿大海。時有羅漢爲僧維那。王即白言。今此劍輪聞揵椎音即便停止。於其中間苦痛小息。」とある。

維那　法会に集僧を引導すること。

増一阿含　『増一阿含経』。初期仏教経典である四阿含経の一つ。

若シ打タンレ鐘ヲ時、一切ノ悪道諸ノ苦並ニ得ウ停止コトヲ　『四分律刪繁補闕行事鈔』・『翻譯名義集』・『佛祖統紀』に、「若打鐘時一切悪道諸苦並得停止。」とある。『法苑珠林』・『諸經要集』にもみえる。いずれも『増一阿含経』によるという。

正元々年　一二五九。

緇素　僧と俗人。

有家　小槻有家。？～一二八〇。小槻氏壬生官務家は、晴富をはじめとして、壬生寺と関係が深い。近世前中期には、壬生寺住持は壬生家の実子または猶子が就任する慣例であった（京都大学総合博物館蔵『壬生家文書』）。

覚慶　不詳。第六巻第五話に執行として名がみえる。

正嘉・正元の比　一二五七～一二六〇。

師檀　師僧と檀那。寺僧と檀家。

二諦　世俗の真理である俗諦と、出世間の真理である真諦。

進止　土地や人を支配すること。檀那が寺を支配することのないように、の意か。

退転　修行で得た悟りを失い、後戻りすること。前よりも悪くなること。

止住　とどまり住むこと。

正嘉元年　一二五七。

金鼓　鰐口。壬生寺の大念仏に用いられたか。壬生寺所蔵の金鼓（昭和三七年七月の本堂火災で鎔融）の銘に、「地蔵院奉鋳顕金鼓壱口正嘉元年丁巳五月廿九日鋳物師大工大和権守土師宗貞」とあった。

【補注】

本話では、『付法蔵伝』や『増一阿含経』に経文があるとされる。しかし、本文と一致する部分が多いのは、それを引用している書、すなわち『四分律刪繁補闕行事鈔』（南山道宣（五九六～六六七））と、紹興十三年（一一四三）『翻譯名義集』（法雲）である。

『四分律刪繁補闕行事鈔』には、

我鳴此鐘者爲召十方僧衆。有得聞者並皆雲集共同和利。又諸有惡趣受苦衆生令得停息。故付法藏傳中罽賦吒王以大殺害故。死入千頭魚中。劍輪繞身而轉隨斫隨生。若聞鐘聲劍輪在空。如是因縁遣信白令長打使我苦息。即増一阿含云。若打鐘時一切惡道諸苦並得停止。此並因縁相召。

とある。『翻譯名義集』には、

我鳴此鐘者。爲召十方僧衆。有得聞者。並皆雲集。共同和利。又諸惡趣受苦衆生。令得停息故。付法藏傳中。罽賦吒王以大殺害故。死入千頭魚中。劍輪繞身而轉。隨斫隨生。羅漢爲僧維那。依時打鐘。若聞鐘聲劍輪在空。知是因縁遣信白。令長打。使我苦息。

とある。

両者に共通する文も多いが、前者がより本話と近い。とはいえ、「羅漢ありて、僧の為に維那して」は、『四分律刪繁補闕行事鈔』にはなく、『付法蔵伝』に「時有羅漢爲僧維那。」とある（『翻譯名義集』では「羅漢爲僧維那。」）ため、参照している可能性がある。

（版本：上巻第九話「当寺撞鐘を鋳る事　付政平瑞夢の事」）

一　本願大僧都感夢事　付佉陀羅山引導事

【本文】

爰に*本願大僧都は*竹馬の幼年より*鳩杖の頽齢に及まで、慈悲喜捨を以て心とし、柔和忍辱を以て行とす。されば*久習練行の学窓には*流を酌て源を尋ぬるに、法水是に依て久しく湛へ、*香を聞て根を討ずるに、仏樹これによていよ〳〵茂し。加之、*惣持*瑜伽の密場には、*五相成身の月千秋の光を耀し、*六大四曼の花万春の匂を薫ず。然則、弱冠の年より地蔵菩薩を持尊として、行

住坐臥にも彼本誓を念じ、*造次顛沛にも悲願を忘れ給はず。殊に当寺の本尊に*親り霊夢を感じまします事、これ度々に及べり。

其中に不思議第一なるは、地蔵菩薩たゞちに快賢僧都を佉羅陀山中へ御引導あり。*昔釈迦大師、此山にして一万二千人の比丘衆、三万六千人の菩薩衆、一切の諸天および諸龍・夜叉・人非人等の衆、金輪銀輪の諸輪王等を十方より来集せしめて延命地蔵経を説給へる儀式を御拝見ありとぞ。門弟の琳厳禅師につぶさに御しめしあり。

それ佉羅陀山利益衆生の事、*経文にみえたり。今しばらく図画して信心をすゝむべきもの也。されば*或経にいはく、絵にかきたるを見ても一たび三宝の境界を信ずれば、有漏の業をつくして無上の仏果をひらくととけり。誠にあさきたわぶれのふかき縁となる事は、絵にすぎたるはなし。この絵を御覧じて一念の信を催したまはむ人は、ゆゝしき地蔵値遇のたよりなるべし。たとへばいたづらに野沢の水を置ながら、草葉の露にやどる月影も、信心をすゝむる光とこそみえ侍れ。そのゆへは、大善をいとなめども、信なくして心濁ぬれば、感応の光をへだつ。それひろき野沢の濁れる水の月をうかべざるにたり。少善を修すれども、信をおこして心をすませば、利益の影をうく。秋草のしげみが下さゆり柴の露をもとめて月のやどるがごとし。おろかなる人の中にさとらざる事あり。仏神に祈るに、のぞむ所かなわざれば恨をなし、経論をよむに、もとむることとげざれば疑をなす。是を邪見の人と申なり。かしこきはたゞ我信心のかしこき也。万善これより始る。つたなきも又我不信のつたなきなり。これ三宝の*偏頗にはあらず。されば釈教には*仏法大海信為能入と説き、儒教には*人無レクバ信而不レ立セ、車ハ無ニ輗軏一不レ行と云り。内外の典籍にも、人は信あるべしとこそをしへ侍れ。

それ佉羅陀山は摩竭陀国の正中に伽耶といふ都あり。其より南の方十五里をすぎて此山はあり。高きこと九百四十丈、広さ七百二十丈也。*本願経にいはく、*地蔵菩薩は十方世界に百千万億の身を現て、その一身ごとに人をゝしへて三宝に帰せしめて仏になすといへり。又一切の日仙、この山に住す無数の菩薩もあつまりたまふととけり。七宝を以て山とす。佉羅提樹多く生たり。黄なる雲つねにそびく。是は六道の衆生の喜も歎もある時の気あつまりて黄なる雲となる。是によりて此山を黄雲山とは申也。地蔵尊、黄色の雲を見給ひて、御身をあまたにわかちて遊化済度す。*経にいはく、慈悲あさき菩薩は浄土に住して衆生を接取す。慈悲ふかき菩薩は穢土に居して群生を利すといへり。*等覚*無垢の大聖、恒沙におはしませども、我等がために慈悲ことにふかきは地蔵菩薩ひとりすぐれ給へり。されば釈迦如来も其悲願をかゞみて、我滅度の後、*弥勒出世の中間、造悪の衆生を引導しましませとぞ附属し給ひし。地蔵もあやぶむ事なくうけとり、力のよく済度にたへておはしますにこそ。

又弥陀の教法のたうときも、末法万年の、ちわづかに百年あるべし。其後は再び聞事かたし。地蔵の教法は五十六億七千万歳なれば、*龍花のあかつきにつゞくべし。我等も其時まで出離せずば、地蔵の外は能化なし。弥陀の浄土は十万億の国を隔てはるかなり。佉羅陀山は中天竺の国のうちなれば、わづかに十万余里の外なり。即身にまいるともやすかるべし。我等に縁のふかくをはするにこそ。又弥陀如来は深重なれども、*接取の光明は念仏の者をのみ照す。もし我等がごとく*散乱放逸の人、信心の念仏は一遍もかたければ、無量光の接取にもるゝ事のかなしかるべきに、地蔵菩薩、此山に住して*毎日晨朝に恒沙の定に入て十方を済度したまふ。我等が伏たるそばへも来り給らむ。されば散乱の称名も天耳の聞をおどろかし、不信の礼拝も仏眼さだめて照しましまさむ。たとひ念奉らずとも、まぼりたまふべし。まして一念も帰依供養せむ輩は、利益をうたがふことなかれ。

【語注】

本願大僧都　壬生寺開基快賢。

竹馬の幼年　竹馬で遊ぶような幼い年齢。

鳩杖の頽齢　老年。「鳩杖」は握りに鳩の飾りがある杖で、宮中から老臣に与えられた。

久習練行　久しく修行を行うこと。

流を酌て～根を討ずる　『摩訶止観』に、「然挹流尋源聞香討根。」とある。真名本『曾我物語』に、「その源を尋ぬれば、偏にこれ、かの仏は威神力の源を尋ねて流れを酌み、香を聞て根を討たんずる時は、豈称嘆を加へざらむや。」とある。

惣持　「陀羅尼」の訳。すべてのものをおさめ保って忘れないこと。

瑜伽　瞑想によって仏と一体になることをめざす修行法。または、真言密教のこと。

五相成身　密教で、行者が五段階の観行を修して仏身を得ること。

六大四曼　真言宗で、六大が万有の本体、四曼はそのすがたであるという関係を示したもの。

造次顚沛　わずかな時間のたとえ。

親り　まのあたり。

昔釈迦大師～延命地蔵経を説給へる儀式　『延命地蔵菩薩経』に、「一時佛。在佉羅佗山。與大比丘衆萬二千人俱。菩薩三萬六千人俱。一切諸天及龍夜叉人非人等。金輪銀輪諸輪王等。従十方来。」とある。

経文　『延命地蔵菩薩経』。

或経にいはく～無上の仏果をひらくととけり　『龍樹菩薩爲禪陀迦王説法要偈』・『往生要集』に、「若見圖畫聞他言或隨經書自憶念」

とある。また『三宝絵』には「昔龍樹菩薩の禅陀迦王をおしへたる偈にいはく、もし絵にかけるを見ても、人にいはむを聞きても、或るは経と書とに随ひて、自づから悟り念へ」とある。

偏頗　かたよっていて不公平なこと。

仏法大海信為能入　『大智度論』をはじめ、多くの経典にみえる。

人無クバ信而不レ立セ　車ハ無ニ輗軏一不レ行　『念佛鏡』に、「又人無信而不立。車無輗軏不行。」とある。『妙法蓮華經玄賛』・『阿彌陀經通賛疏』に、「自古皆有死人無信不立。如大車無輗小車無軏。」とある。『論語』顔淵第十二に、「曰、去食。自古皆有死。民無信不立。」とあり、『論語』為政に、「子曰、人而無信、不知其可也。大車無輗、小車無軏、其何以行之哉。」とあるのが出典である。

本願経　『地蔵菩薩本願経』。

地蔵菩薩は十方世界に〜仏になすといへり　『地蔵菩薩本願経』に、「毎一世界化百千萬億身。毎一身度百千萬億人。令歸敬三寶永離生死至涅槃樂但於佛法中所爲善事。」とある。

経にいはく〜群生を利すといへり　出典未詳。

等覚　菩薩の最高位。菩薩が修行を完成して正覚（真の悟り）の仏と等しくなった位。

無垢　煩悩のないこと。または、等覚の位のこと。

弥勒出世の中間　釈迦入滅から、弥勒が五十六億七千万年後に現れるまでの間、地蔵菩薩が衆生を救済するという。

龍花のあかつき　龍華三会のこと。釈迦入滅から五十六億七千万年後、弥勒菩薩がこの世に出て龍花樹の下で悟りを開き、衆生済度のために開くという三回の説法の会座。

接取の光明は念仏の者をのみ照す　『観無量寿経』に「光明遍照十方世界。念佛衆生攝取不捨。」とある。

散乱　心が乱れること。

毎日晨朝に恒沙の定に入て十方を済度したまふ　『地蔵十輪経』に、「此善男子。於一一日毎晨朝時。爲欲成熟諸有情故。入殑伽河沙等諸定。從定起已遍於十方諸佛國土。」とある。『往生要集』に、「地藏菩薩。毎日晨朝入恒沙定。周遍法界拔苦衆生。」とある。

（版本：中巻第一話「本願僧都夢中に佉羅陀山に至る事」）

一　同僧都夢中六地蔵名号授給事　付六道能化功能事

【本文】

＊永承季中の比、本願大僧都禅室に入給ふ時、生身の地蔵菩薩とおぼしくて、六導の能化たる六地蔵尊の名号を具に御演説あり。これ則＊黄泉嶮路のよそおひ、閻魔庁庭のくるしみ也。然に夢中の見相を御弟子中将阿闍梨性尊に御しめしあり。

夫六地蔵の深秘は、＊蓮華三昧経にとけり。すこしきもたがはず。

奇異の勝事、何ごとか是にしかむや。

先第一の檀陀地蔵は地獄道の能化也。檀陀とは天竺の語、爰には人頭と翻せり。琰魔の庭に*人頭幢あり。罪人にむかひて忿怒の顔を現じ、口より鉄鎖を吐て罪人を縛り、先世の罪業を白状すること明鏡にして隠なし。其時彼白状に任て、琰魔王造悪の者を八寒八熱の奈利に落したまふ。罪人は自業自得の因果をば顧ず、たゞふかく人頭幢を恨が故に、地蔵菩薩罪人の歎をかなしみ給ひて、人頭幢を摯て舌をまき口をとぢて物をいわせず、彼白状を止たまへり。人頭すでにをしこめらるゝうへは、八面の*浄頗利鏡も打破り、また*挍量業の秤も折すてゝ、獄卒をしりぞけ地獄の釜を破折して、罪人をとり出し*苦をぬき楽をあたふる事、偏に檀陀地蔵の利生也。

第二に餓鬼道の能化たる宝手地蔵は、手に如意宝珠をすべ給へり。夫餓鬼道の衆生は、先世の慳貪の罪により、五百歳を送りて飲食の名字をすら聞事なし。飢羸憧惶のあまり己が脛を砕ひて食ひ、身づからが子をとりては飢をやすめんとすれども、暫もなぐさまむ事なければ、地蔵菩薩如意珠より餓鬼道の衆生のこのむところの種々の飲食をふらして、忽に飽足せしむるゆへに宝手地蔵となづけ奉る。夫餓鬼道の苦患をぬひて法喜禅悦の楽を与る事は、宝手地蔵の利生也。

第三に畜生道の能化たる宝印手地蔵は、如意宝印の御手をのべて、寸の虫は分の虫をのみ、尺の虫は寸の虫を食ふことを取得て、互残食の苦をぬひて、*実相甘露の法味をあたへ給へり。凡畜生道は小より大にいたるまで、飲血を残害する苦たへがたし。*金翅鳥はあさな〳〵大海をあふぎほして一千の龍子を取噉ふ時、父母の大龍これをみて歎き悲む事、幾許哉。その報答に*難陀跋難陀龍王は須弥山を七匝に搦巻て尾をあげて山を扣ば、須弥頂の鉄樹に巣をかけて産をく金翅鳥の卵ども、ゆすられて落事、霰雨のごとくなるを、二龍口を開てその卵を呑に、父母の金翅鳥是を見て悲む事、いかばかりぞや。如此の苦患たへがたきを地蔵菩薩如意宝印の御手をのべて畜類の苦をぬきたまふこと、偏に宝印手地蔵の利生也。

第四に修羅道の能化たる持地々蔵は、それ修羅は地にすみ、帝釈は天に居す。されば天地の中あしくして、毎月の十六日の辰の一点には決定として合戦あるに、修羅は毎度軍にまけて引退て闘諍の楯を大海の底にすつ。天にもし雷鳴ば天帝釈軍の鼓かと聞て、肝をけし魂をうしなふ。苦患云ばかりなし。此時持地々蔵、大地をたもち、*合戦道の城郭を警固し給ひ、安穏ならしめて闘諍の苦をしりぞくる故に、持地々蔵とは申なり。されば彼菩薩を憑奉れば、かならず軍に勝ゆへに勝軍地蔵と号す。是持地々蔵の悲願也。

第五に人道の能化たる除蓋障地蔵は、人間の八苦の蓋障を除て故に此嘉名をたつ。夫*八苦は蓋のごとくに覆て、人間の楽をさゆれ

ども、地蔵尊を信ずれば時日を廻さず、貧窮困苦の者に福徳の楽をあたへ、乃至死苦の者には定業を転じて延命の楽を施給ひて、*臨終正念に住し、八苦の蓋障を退る事は、除蓋障地蔵の利益也。

第六に天道の能化たる日光地蔵の利生は、*天人五衰の闇を照し給ふ地蔵なり。夫天人には五衰の禍雲たちぬれば、悲み来る事限なし。此時かならず死せんとす。しかりといへども、地蔵尊を信ずれば、忌雲たちまちに晴て、日光地蔵のめぐみを蒙る故に長寿天となれり。是日光地蔵の済度也。夫地蔵の真実の本地は、一代聖教の中に秘してあらはさゞる勝事なるをや。日光地蔵と申は日天子なれば、本地観世音なり。又観音の本地は弥陀如来と号す。されば*秘経には*観自在王如来と説り。娑婆にしては観音と現じ、極楽にては弥陀*覚王の果徳を成じて、三世常恒に念仏の衆生を来迎し給へり。然則、弥陀・観音・地蔵尊は同体異名の利生方便なり。弥陀如来は妙覚高貴の御姿にして、*下化衆生の形に相応せざれば観音と変ぜり。観音も猶声華に、首に宝冠をめして、身に瓔珞をかざり、気高幽玄にましませば、*潦倒ぬる声聞の形たる地蔵と成て、六道の底にしづみはてゝ浮べる期なき罪人を、毎日の晨朝に諸の地獄に遊化して受苦の衆生を救給へり。また*観音の弘誓のふかき事、海のごとくなるも、地蔵の深重の慈悲には及ばずと云り。所以者何、いづれの菩薩か晨朝ごとに諸の地獄に入て罪人の苦にかわり給ふや。百劫の中におひて無量数の菩薩に帰依せむよりは、一念の間も地蔵菩薩を信ずる功徳にしかずとみえたり。されば経には*一日称スレバ地蔵ヲ功徳大イナリ、名ヲ聞クモ勝レタリ俱胝劫ノ中ニ称スルニハ余ノ智者徳ヲ説けり。それ大慈大悲の至極したるを地蔵薩埵とは申也。

是地蔵菩薩まのあたり本願大僧都に霊夢を感ぜしめ給ふによりて、此大事をしるせり。利生行願の不思議なる事は、如来無碍の弁説を以て無量億劫説給ふとも、宣つくすべからず。何況や凡夫の吻を以て演申さむ事は、蚊虻の大海を吸ひ、螻蟻の須弥を動かさんがごとし。但、*経の中には地蔵の功徳無量百千万分にして、其一分を説き、又功徳をのぶるに、一度も名号を唱へむ人は、巨益无量無辺なりといへり。

【語注】

永承季中　一〇四六～一〇五三。

黄泉嶮路　死後、地獄へ向かう険しい道のり。

蓮華三昧経　現在「蓮華三昧経」と呼ばれるのは、『妙法蓮華三昧秘密三摩耶経』であるが、地蔵尊のことは触れられていない。『与願金剛地蔵菩薩秘記』に、「六地蔵尊ノ秘中ノ深秘ハ見タリ於蓮華三昧経ニ」とあり、本話における地獄と六地蔵についての記述と同様の内容がある。

人頭幢　閻魔王の持物で、端に人間の頭をのせた杖。生前の善悪を判断する。

浄頗利鏡　閻魔王庁にあり、亡者の生前の善悪の所行を映し出す。

挍量業の秤　業の秤。地獄で、亡者の生前の悪業の軽重をはかる。

苦をぬき楽をあたふる　『延命地蔵菩薩経』に、「抜苦与楽」とある。

実相甘露　「実相」は一切のものの真実の姿。「甘露」は三十三天の不死の霊液。苦悩を去り、長寿になり、死者をもよみがえらせるという。転じて、仏の教え・悟り。

金翅鳥　迦楼羅。仏法を護る八部衆の一。金翅鳥が龍を食らう様子は、種々の経典や、『宝物集』・『太平記』などにみえる。

難陀跋難陀龍王　難陀竜王と跋難陀竜王。ともに八大龍王の一。

合戦道　修羅道。訓読本『曾我物語』に、「弓箭に懸りて修羅の苦患を受け給ふらんと悲しきに、たまたま一人の子を法師になして、合戦道の苦をも助け奉らんと思へば」とある。

八苦　人間の八つの苦しみ。生・老・病・死・愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五陰盛苦。

臨終正念　臨終の際、心静かにして乱れないこと。

天人五衰　天人が死ぬときに現れる五種の徴候。教説により差異がある。

秘経　未詳。『与願金剛地蔵菩薩秘記』の当該部分にも、「秘経ニ阿弥陀如来ヲ名ニ観自在如来ト」とある。

観自在王如来　阿弥陀仏の別称。

覚王　仏を敬っていう語。

下化衆生　菩薩が衆生を教化・救済すること。

潦倒　態度や姿がおだやかで奥ゆかしいこと。

観音の弘誓のふかき事、海のごとく　『法華経』に、「弘誓深如海。歴劫不思議。」とある。

一日称スレバ〜余ノ智者徳ヲ　『大乗大集地蔵十輪經』に、「一日稱地藏　功德大名聞　勝俱胝劫中　稱餘智者德」とあり、『往生要集』にも引用されている。

経の中には〜巨益无量無辺なりといへり　出典未詳。

【補注】

本話で説かれる六地蔵の功徳については、『与願金剛地蔵菩薩秘記』（伝良助撰、写本は現存しない）にみえる。本書の成立時期について、真鍋広済氏は享徳二年（一四五三）以前、応永年間という（『地蔵菩薩の研究』三密堂書店、一九六〇年）。水上文雄氏は、上限を延文〜永和、下限を応永頃という（『台密思想形成の研究』、春秋社、二〇〇八年）。

以下に、元禄三年の跋文を持つ刊本である、京都大学附属図書館

蔵本の当該部分本文を翻刻して示す（一部を除き竪点は省略した）。なお、牧野和夫、杉山友美「「与願金剛地蔵菩薩秘記」―実践女子大学図書館山岸文庫蔵―」（『実践国文学』四五、一九九四年三月）を参考にした。

我　朝ニ未タ知ニ蓮華三昧経ノ六地蔵深秘ノ本地ヲ今可レ述レフ之ヲ蓮華三昧経ニ言ク第一地獄道ノ能化檀陀地蔵トハ者檀陀ハ梵語此ニハ翻ス人頭ト人頭ハ琰魔ノ庁ニ有リ人頭幢一人頭幢現ス忿怒ヲ口ヨリ吐ニ鉄鎖ヲ縛ニ執ス罪人ヲ前世ノ罪業白状明明ニメ無シ隠レ爾ノ時琰魔王任セ人頭幢ノ白状ニ執テ罪人ヲ随ス八寒八熱一百三十六ノ泥犁ニ罪人不レ顧ミ己カ罪業ヲ唯恨ニ人頭幢ヲ此ノ時地蔵菩薩ノ悲願力ノ故ニ執テ人頭幢ヲ巻レ舌ヲ閉ハテ口ヲ不レ語ラ玉ハ而止ルヲ諸ノ白状ヲ名ニ檀陀地蔵ト第二餓鬼道ノ能化宝珠地蔵ハ手ニ居ユ如意宝珠ヲ所以ハ者何ン餓鬼道ノ衆生依テ前生慳貪ノ罪ニ経レ七百歳ヲ無シ聞ニ飲食ノ名字ヲ飢羸惶ノ之餘摧キ己カ脳ヲ散シ取リ自ノ子ヲ食ノ欲ス息メント飢ヲ暫モ無シ慰「於茲ニ地蔵菩薩従リ如意宝珠ヲ雨スニ餓鬼道ノ衆生ノ所レ好ム種種ノ飲食ヲ飲ミ之ヲ食レ之ヲ忽チニ令ル「飽足セ如シ如意宝珠ノ第三畜生道ノ能化宝印地蔵ハ伸テ如意宝印ノ手ヲ抜キ畜生道互相残害ノ苦ヲ各各ニ與ヘ微妙清浄ノ飲食ヲ各各ニ含シム実相甘露ノ法味ヲ金翅鳥両翅ノ中間三百六十万里金翅鳥朝朝ニ扇ヒテ于大海ヲ日日ニ噉フ一千ノ龍子ヲ時ニ父母大龍見テ之ヲ嘆キ悲ム「幾許ソヤ耶然ルニ則難陀龍王跋難陀龍王囲ニ繞スル「八万四千由旬ノ須弥山ヲ七重展ニ頭ヲ於須弥ノ之頂ニ挙テ尾ヲ扣レ山ヲ須弥山ノ頂鉄樹ノ之上ニ金翅所産ノ巣中ノ卵被ニル、「打チ落レ如シ霰雨ノ此ノ時彼ノ大龍開テ口ヲ呑レ之ヲ父母ノ金翅看テ之ヲ悲ミ鳴ク於テ茲ニ地蔵展テ如意宝印ノ手ヲ抜キ苦ヲ與フ楽ヲ偏ニ是レ宝印手地蔵ノ利生ナリ第四修羅道ノ能化持地地蔵修羅ハ者栖シ地ニ帝釈ハ居ス天ニ毎月十六日辰ノ一点ニ決定メ帝釈ト修羅ト合戦ス修羅毎度負テ軍ニ引退ク闘諍ノ楯落ツ大海ノ底ニ天若シ雷鳴ノ聞テ天帝釈ノ軍鼓ヲ消レ肝ヲ失テ魂ヲ苦患無量也是ノ時持地地蔵持チ大地ヲ持ツテ修羅ヲ警ニ固シ玉フ合戦道ノ城郭ヲ其ノ時阿修羅宮安穏ニメ脱ルレハ闘諍ノ苦患ヲ名ニ持地地蔵ト第五人道ノ能化除蓋障地蔵トハ者除ク人間八苦ノ蓋障ヲ八苦トハ者（中略）如ク此ノ八苦ハ如ニメ蓋覆ノ障フ人間ノ楽ヲ当テ此ノ時ニ地蔵薩埵貧窮困苦ノ者ニハ與ヘ福徳ヲ愛別離苦ノ者ニハ生別死別共ニ與ヘ再会ノ楽ヲ怨憎会苦ノ者ニハ退ケ怨ヲ払テ敵ヲ與ヘ安穏ノ楽ヲ五盛陰苦ノ者ニハ転メ五陰ノ苦ヲ與ヘ常住ノ楽ヲ生苦ノ者ニハ與ヘ平安誕産ノ之楽ヲ老苦ノ者ニハ與ヘ不老ノ楽ヲ病苦ノ者ニハ與ヘ無病ノ楽ヲ死苦ノ者ニハ転メ定業ヲ與ヘ延命ノ楽ヲ臨終正念ニハ與フ生ニスルノ浄土ニ楽ヲ第六天道ノ能化日光地蔵トハ者照シ玉ヘリ天人五衰ノ闇ヲ五衰ニ有リ小ノ五衰有リ大ノ五衰小ノ五衰トハ者（中略）信スレハ地蔵尊ヲ五衰ノ雲晴テ蒙リ日光地蔵ノ恵ヲ生ニ長寿天ニ問フ地蔵菩薩ノ真実ノ本地ヲ蓮華三昧経ニハ如何ンカ説キ玉ヤ哉

答フ南方宝生仏ト是レ実義也雖レ𪜈爾リト六地蔵ノ中天道ノ能化日光地蔵日光地蔵ハ日光天子日光天子ハ日天子也日天子ノ本地ハ観世音観世音ノ本地ハ阿弥陀如来也是ヲ以テ秘経ニ阿弥陀如来ヲ名ニ観自在如来一ト婆婆世界ニテハ成ニ観自在菩薩一ト極楽浄土ニテハ成ニ観自在如来一ト観自在菩薩ハ成リ日光地蔵一ト日光地蔵成ニ六地蔵一ト六地蔵ノ本地ハ観音六観音ノ本地ハ西方極楽阿弥陀如来ナリ当レ知ル諸仏菩薩ハ大慈大悲ヲ為レ体ト故ニ下リ下レルヲ為レ貴ト阿弥陀如来妙覚ノ之体ニメ而下ニ化シ玉ハ、衆生ヲ其ノ形不ニ相応セ一故ニ弥陀変メ成ニ観音一ト首ニ戴キ宝冠一ヲ身ニ荘テ瑠璃一ヲ現シ声聞形ヲ済ヒ六道ノ衆生ヲ

本文には多くの一致がある。本稿では『与願金剛地蔵菩薩秘記』の性格等について詳述する余裕はないが、何らかの関係性があろう。

（版本：中巻第二話「本願僧都六地蔵の名号功徳感聴の事」）

一　同僧都遷化事　永承六年十一月十六日

【本文】

しかるに本願大僧都一生の行業事おえて、*永承六年十一月十六日の夜半にのぞむで*遷化の別を告給へり。顕密練行の智者にてましませば、自身即仏の*開悟、此時にあらはれり。端坐合掌の相貌を見奉る道俗の貴賤は、互に大僧都をもつて地蔵尊とあがめぬ者はなかりけり。

されば終焉の体たらく、西壁に*弥陀の三尊并に持尊の地蔵菩薩を安置し、前後左右には遺弟の諸人おの〳〵恋慕渇仰の思ひをこらせり。夫釈迦如来、*提河に潤をやめ、堅林に蔭を闇ふせし哀慟にことならず。然則、天より花ふり、音楽空中にきこえ、紫雲室にたなびく。是一期の間、地蔵尊を或は空印し、或は摺写し、礼拝供養の行功を積たまふにや。臨終に、まのあたり小仏の地蔵そのかずをしらず十方に涌現したまふとぞ。最後の御遺言不思議の勝事なり。

国土の人民競ひ来て瞻仰を至し、遠近の緇素手をこまぬひて感歎を催す。いま霜月中旬第六の天にあたりて、蓮台九品の教風にうつり給へり。それ老菊衰蘭のよそおひは秋霜を経てながくしぼみ、金台宝蓮の迎は暁雲に伴てふたゝび還らず。忽に*五々流転の境をはなれて、竟に*三々浄妙の台にうつり給ふ。悲哉、前途をいづれの所にかとぶらわむ。黄泉の路ほどとをし。後会だれか家にか期せむ。西刹の雲遙なり。芳言いまだわすれざるに、いたづらに竹窓の風を聞て腸をたち、温顔いづくにか去。むなしく苔径の月に対して心を傷しむ。計知ぬ、三密の檀前には久しく心月円満の相を観じ、いま八葉の蓮上には定て*大日遍照の覚位を証給ふらん。夫地蔵薩埵の加被護念なれば、現当の勝益いかでかあさかるべき。本願上人の行状、その梗概をしるす事かくのごとし。

仍、本願以来当寺代々の執行は、蓮華房広厳、蓮聞房勝厳、蓮定

房覚俊、甲斐法橋覚玄、大進阿闍梨興玄、玄覚房

〈錯簡〉

正音房阿闍梨永賢、若狭阿闍梨行実、少輔阿闍梨観毫、備中法橋聖慶、上野阿闍梨覚慶、土佐阿闍梨尊珍、かくのごとき等の諸衆展転相続して、堂舎の興行退転なし。天長地久、国土太平の宝祚を祈り奉る所なり。

宝幢三昧寺縁起第六

【語注】

永承六年　一〇五一。

遷化　高僧が死ぬこと。

開悟　迷いを脱却し、真理を悟ること。

弥陀の三尊　阿弥陀仏を中心に、左に観音菩薩、右に勢至菩薩を脇士とする三体の称。

提河に潤をやめ、堅林に蔭を闇ふせし　「提河」は「跋提河」の略で、古代インドの拘尸那掲羅国の川。「堅林」は沙羅林。いずれも釈尊入滅の場所。『四座講式』に、「不可説不可説三寶境界而言　夫自提河輟潤堅林暗影之後。」とあり、『大唐大慈恩寺三藏法師傳』に、「逮提河輟潤堅林晦影」とある。

五々流転の境　二十五有（衆生が輪廻する三界を二十五にわけたもの）を流転すること。

三々浄妙の台　九品蓮台のこと。極楽浄土に往生するときに座る蓮の台。「浄妙」はこの上なく清浄なこと。

大日遍照の覚位　妙覚位（無上の悟りを得た位）のこと。「大日遍照」は大日如来、「覚位」は仏の位。『真如観』に、「大日釈迦等の妙覚」とある。

（版本：中巻第三話「本願僧都示寂の事」）

（完）

〔付記〕壬生寺長老松浦俊海師、壬生寺貫主松浦俊昭師には、格別のご配慮を賜りました。あつく御礼申し上げます。